

「平成28年度林業普及指導員全体研修会」 「人材育成」と「林産業振興」をテーマに開催

去る2月2日に「平成28年度林業普及指導員全体研修会」を、「プラザおでつて」（盛岡市）で開催しました。本研修会は、林業普及指導員（以下、「指導員」）の資質向上を目的として毎年開催しています。

研修会は、

- (1) 普及活動事例発表
 - (2) 自己啓発研修の成果報告
 - (3) 特別講演
- の3本立ての内容で開催しました。

1 普及活動事例発表

各普及区の地域課題の解決に向けた取組等について、20名の指導員が発表を行いました。

今年度の発表では、必須テーマを「地域の特徴に応じた林業普及指導員の人材育成の取組」とし、その他のテーマとして「木材利用の促進や特用林産物の生産振興等の取組」と設定しました。

(1) 「人材育成」に関する発表

近年、林業労働者の減少や高齢化が進む現状を踏まえ、指導員が林業事業体と連携を図り、人材確保に向けた活動を展開している事例が多く報告されました。

その一例として、新規就業者の確保、就業者の定着率向上に向け、高校生を対象とした「体験型林業・木材講座」及び事業体を対象とした「新規就業対策セミナー」を開催した事例や、求職者と事業体とのミスマッチを減らし離職率の低下を図るため、実際の作業現場を見学する「職場見学会」を実施した事例などが報告されました。

また、既就職者の人材育成例として、地域の森林経営のあり方を考える森林所有者に提案を行う「森林施業プランナー」の育成支援を、指導員が担うといった事例も報告されました。この事例では、プランナー試験の受験を契機として、林業事業体の人

材育成への意識向上を図るよう働きかけ、プランナー養成研修会の企画・実施講師を指導員が担当しました。

成果として、それまでのプランナー有資格者の倍以上のプランナーを育成し、事業体の人的基盤を充実させることになりました。



高校生を対象とした実習に関する発表

(2) 「木材利用、特用林産物の生産振興等」に関する発表

ここ数年は、放射性物質の影響対策に関する発表が多く見受けられましたが、今年はこれに加え、木炭生産振興や畑わさびの増産に向けた普及活動に関する事例発表も見られ、変化に富んだものとなりました。

また、木質バイオマス発電施設の稼働に合わせ、松くい虫被害材を燃料として活用できないかと検討した事例が発表されました。

この事例では、被害木の長さにより発電施設で受け入れの可否が変わることから試験を実施したほか、枯損度合いにより燃料として使用可能かどうかを検証しました。使用にあたり、未だ課題が残っていることから、今後も引き続き検討を重ねることです。

2 自己啓発研修の成果報告

本県では、指導員の資質向上対策の一環として、地域課題を解決するため、指導員自らが希望する研修内容及び研修先を企画・選定する研修を実施しています。

今年度は、5名の指導員がこの制度を活用して研修を行い、そのうち2名が代表として研修成果を発表し、情報を共有しました。

研修内容は、「アカマツ材の利用拡大に向けた取組」と「木質バイオマス発電用チップの高速脱水技術」についてでした。

アカマツ材の利用拡大に向けた取組」では、長野県におけるアカマツ材の利活用方策について説明がありました。長野県では豊かな森林資源を多段階的に活用するため「信州F・POWERプロジェクト」を策定し各種事業を推進しており、この事業でアカマツの床材製造施設を整備しています。

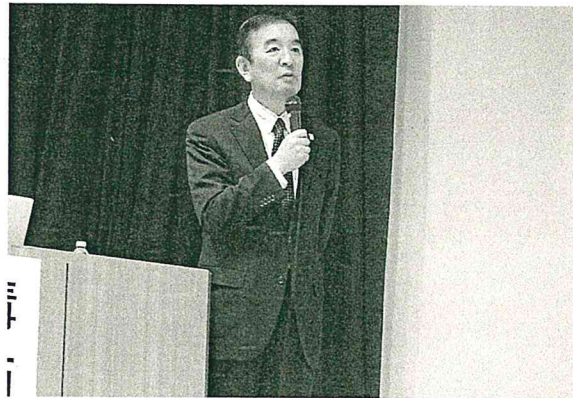
研修先の事業体では、床材等の大型工場がない分野に参入することにより参入障壁を低くしたとのことでした。

また、木質バイオマス発電用チップの高速脱水技術」については、本技術により、チップ水分率の安定化が図られ効率的な発電につながるのとや脱水チップは軽いため輸送経費の低減に効果的である旨の説明が行われました。

さらに、チップ脱水機の仕様に基づき、指導員が発電コスト試算を行い、優位となる条件の解析を行った事例の説明がありました。これにより、木質バイオマス発電事業体と協議する際の知見が得られました。

3 特別講演

特別講演では、「ICTによる林業課題の解決手法について」と題し、岐阜県東白川村地域振興課長桂川憲生氏に講演をいただきました。



講演講師 桂川 憲生 氏

東白川村では、平成15年頃から基幹産業である建築業の営業所得が著しく低下したことから、インターネットを活用した木造注文住宅の取りシミュレーション、簡易見積のシステムを構築しました。

また、村役場が建築士・工務店の紹介や施工契約までをサポートする事業（フォレストスタイル）を行っています。

特筆すべき点は、なぜ在来木造住

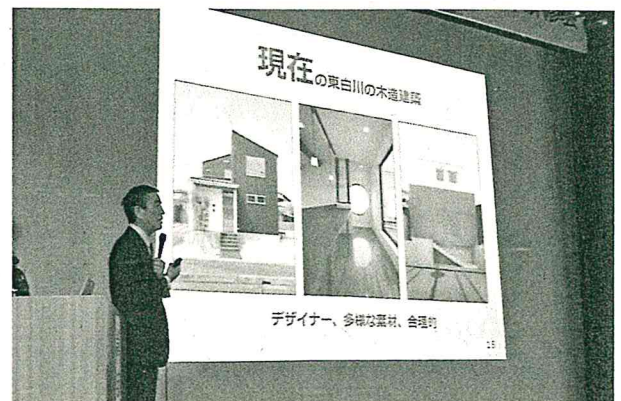
宅を建てようとする人がなくなってきたのかについて、買い手側の視点から論理的に分類・整理し、洗い出された課題の一つ一つに具体的な解決策を示している点です。

例えば、若い人が在来工法住宅を敬遠するのは、「デザインが古いと感じているから」と分析し、在来工法住宅にこだわらず、ハウスメーカーが取り入れている流行のデザインとなるよう建築士と連携を図っています。

「フォレストスタイル」立ち上げ当初は、地元工務店から「在来工法以外はできない」といった反発もあったそうですが、対話を重ねて今の形を作り上げられたそうです。

講演の最後に、「情報発信」、「規格化」、「モレを作らない」をキーワードとして上げられました。「情報発信」とは、インターネットでの検索が日常化しているのので、知ってもらいように情報を出すことを意図しているそうです。

私達、林業・木材産業関係者も今まで以上に積極的に情報発信し、理解を求めると考えさせられました。



消費者ニーズを取り入れた住宅の紹介

林業技術センター普及班
019 (698) 1337

